

主題	特養における日常生活の中の音楽療法の重要性
副題	職員の観察力が利用者の能力を引き出す

音楽療法	多面的理解	研究期間	10ヶ月
------	-------	------	------

事業所	社会福祉法人 同胞互助会 特別養護老人ホーム 愛全園
-----	----------------------------

発表者：鈴木 伯実 (すずき ともみ)	アドバイザー：伊藤 和美 (いとう かずみ)
---------------------	------------------------

共同研究者：濱野 睦 (はまの むつみ)、大澤 正和 (おおさわ まさかず)
--

電話	042-541-3100	E-mail	aizenen@doho-gojyokai.com
FAX	042-546-8284	URL	http://doho-gojyokai.com

今回発表の事業所やサービスの紹介	昭和39年に東京都の第一号の特別養護老人ホームとして併設されました。徹底した個別ケアに基づき、生きがい活動やリハビリなどのお手伝いをしています。また、常勤医師を配置することにより生活の中の医療を充実させることで、健康管理を行っています。介護サービスは、医療・リハビリ・介護の一体の理念を下に行われています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

昭和55年より毎週金曜日の午後、外部より講師を招き音楽を用いて心身のリハビリテーションを図ることを目的に、能動的集団音楽療法（赤星式音楽療法）を実施している。その音楽活動を愛全園ではフェニックスと呼んで、スズ・タンバリン・トライアングル・タイコを使用。楽器の選択は、講師・職員・ボランティアが利用者のADL・認知症程度を観察し楽器を決めている。毎回平均参加人数は70～80名。ケアプラン・体調等を考慮して、毎週参加・隔週参加・月一回の参加など、全利用者に対応して離床し誘導を行っている。

フェニックスは、以下の効果が求められる。

身体的効果として、

- ・音楽を使っての心肺機能の強化・維持
- ・楽器を使っての身体運動による生活不活発病の予防

心理的効果として

- ・利用者にとって自己表現の場や気分転換の場となることである。

その効果を得るためには、職員の果たす役割が大きい

開始当初より継続的な課題として、下記の2点がある。

- 1 集団の中であっても、一人一人に目を向けなければならない。
- 2 集団であっても、その人らしさを発揮できる環境を作らなければいけない。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

目標：利用者の能力を引き出し、利用者が生き生きとフェニックスに参加し楽しめるように目指す

期待する成果：誰でも参加しやすく、開かれた活動の場として、講師・職員・ボランティアで協力しながら、利用者が生き生きとフェニックスで楽しめるようにする。

《3. 具体的な取り組みの内容》

課題1については、毎回活動終了後に、講師・職員・ボランティアでミーティングを行い、利用者の表情や参加時の様子等意見交換をする。

問題点は改善策と考え、次週に実施する。また月に1回、医師・音楽療法講師・介護職員の3者で会議を開く。

課題2については、①座席の配置（人間関係にも考慮） ②楽器の選択 ③誘導の順番（座位の確保等の体力面、落ち着きのなさ等の認知面）を音楽の場面でだけでなく、日常の様子を踏まえて、判断していく

《4. 取り組みの結果と考察》

活動中は、講師・職員・ボランティアのそれぞれの立場で観察しているため、ミーティングでの意見交換によって違った視点を知る事が出来る。また、医療との会議をもつことで、医療的な理解も深まる。従って、日常の様子も含め職員は、利用者を多面的に理解できる。

その多面的な理解がその人らしさを発揮できる環境作りにつながっていく。

その効果を確認できた事例を述べる。

S様。65歳男性。要介護4。脳出血、左半身マヒ。構音障害あり。MMSE9 13/30。運動性失語はあるが指示理解は可能。意思疎通は、頷く・首を振るなどが可能。日頃より自身から手を上げることで職員との意思疎通のきっかけを作っていた。

2012.7.19に入所し、7.20にフェニックスに参加。初回より、少し歌う、手拍子をする様子がみられ、参加を重ねるにつれ、楽器を振る、体操をするなど手を動かす動作が増えた。一方、日常生活では、車イス自操での徘徊、食事に対する認知・集中力の低下がみられ、自操は頻回であった。フェニックスでは、車イスでの自操もなく、集中力を持って、身体運動も行っていることから活動参加による効果を実感できた。

日々の介護でみられる、右手を上げ、まっすぐ振り下ろす動作が「タイコを叩く」という、動きにつながるのではないかと考えた。

また、フェニックス中は終始落ち着いて参加されていることから、タイコを担当することで、役割意識や生活のハリに繋げてほしいと考えた。その期待通りにS様は集中力を持って音楽に合わせ、リズムにのってタイコを力強く叩いて、キメや終止もしっかり叩いてタイコの役割を果たしている。

タイコ担当として、役割意識を持ち欠かせない存在となっていった。

《5. まとめ、結論》

S様がタイコ担当という発想は、講師もボランティアも持っていなかった。普段から利用者に深く関わっている介護職員だからこそその発想であった。その発想に驚きとともに喜びの感想が上がった。毎回、講師・職員・ボランティアそれぞれの立場で観察し話し合うことで、協力体制が強まっており、同じ目標に向かっていることが感じられた。今後も、利用者が活動を楽しむだけでなく利用者の残存能力を引き出し、その人らしさを発揮できる環境を作ることが大切だと思った。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることは無いことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。（2014.6.22 相談員より家族へ電話し了承をえる）

《7. 提案と発信》

この活動は昭和55年より、定期的に継続していることで、利用者の生活リズムにつながっている。フェニックス＝毎週金曜日で、曜日感覚を取り戻す方もいる。日常生活の中で音楽療法の重要性を感じる

【メモ欄】